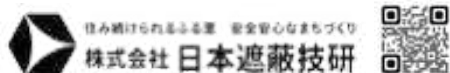


令和8年度「放射線科学とその応用」  
第2回研究会 令和8年7月3日

## 住み続けられるふる里の 実現を目指して



代表取締役副社長 平山貴浩 (Founder)



日本遮蔽技研の平山です。皆様、本日はお時間をいただき、誠にありがとうございます。「住み続けられるふる里の実現を目指して」というテーマでお話しする機会をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。

## 会社概要



会社名	株式会社日本遮蔽技研（ニッポンシャヘイギケン）
所在地	本社・福島校正センター 〒969-1113 福島県本宮市本宮字坊屋敷276番地
電話番号	0243-24-9355
代表者	代表取締役社長 平山 泉
資本金	4050万円（資本準備金:1750万円）
設立	2010年3月4日（創業 2011年8月3日）
従業員数	7人（役員含む）
親会社	Genki Group 株式会社サンガジャパン <a href="https://genki-group.jp/">https://genki-group.jp/</a>
事業内容	● 放射線遮へい・測定の専門技術サービス提供 ● 画像認識AIを活用した保安製品・サービス提供 ● 光応用技術（レーザー）製品・サービス提供
許認可	放射性同位元素等使用許可〈原子力規制委員会 第7117〉 古物商許可 自動車商〈福島県公安委員会 第251300000381号〉 ISO/IEC 17025:2017 認定98357 PJLA 電気通信事業者 届出番号 I-07-01127 プライバシーマーク登録 第23860066(01)号

ホームページ：<https://nipponshaheigiken.com/>



弊社は2010年3月に、現在とはまったく別の目的で西新宿で設立しました。事業スキームがすべて固まったところで、東日本大震災がありました。当時企画していた事業は、わたくしがやっていた別の会社に移し、空っぽにした会社を、現在の日本遮蔽技研に業態変更して動きだしました。ので、設立と創業が逆転している次第です。

## 福島が「3.11」後に直面してきた課題

課題が徐々に変化

### 放射線遮へい・放射線測定が急務

2011年3月、福島第一原発の事故発生。復興の第一歩として、目に見えない放射線の遮へいや、検知するための測定が急務に。

### 放射能除染・放射能濃度測定技術が必要

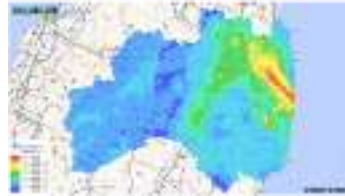
放射線遮へいの実現後、県内の実情に最適化した放射線測定方法や、環境除染や自動販売機など動産物の除染対応が必要に。

### 被災地で獣害が多発

被災地に住民が戻り始めるも、避難中に野生化した家畜や、イノシシやクマなどの動物が増加。住宅や農作物被害を防ぐため、鳥獣の早期検知の仕組みが必要に。

### 太陽光発電施設で銅線盗難が多発

仮設住宅等の跡地の有効活用として建設された太陽光発電施設で銅線盗難が頻発。被害を予防する検知システムが必要に。



福島第一原発事故発生から約9ヶ月後、2011年12月時点の福島県内空間線量率の経時変化解析結果を示したマップ。福島県の線量率の高さが分かる。

・福島県ホームページより引用

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/298/keijihenka-201112.html>



2024年11月1日付けで福島県のホームページに出された太陽光発電施設における盗難に関して注意喚起する案内。

・福島県ホームページより引用

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11025c/taiyoukou-tyuuikanki.html>

東日本大震災後の福島県内は、復旧・放射線対策という課題が山積みでした。そして、時間とともに、課題が変化してきました。広大な避難地域は雑草と動物の楽園と化し、その後、帰還者の受入がはじまりました。そして、中間貯蔵施設稼働後、運び出されて空き地になった仮置場や、解体された仮設住宅跡地が、メガソーラーになりました。

## “変わりゆく課題”への対応＝当社のサービス開発の歴史

サービス開発  
の変遷

課題が徐々に変化

### 放射線遮へい・放射線測定が急務

2011年3月、福島第一原発の事故発生。復興の第一歩として、目に見えない放射線の遮へいや、検知するための測定が急務に。

2012年 線量計用コリメータ販売

2013年 オンサイト放射能濃度測定システム「Monster」開発  
GPS運動型空間線量率自動記録システム「NSG-System」開発  
GPS運動型水中線量率自動記録システム「Poseidon」開発

### 放射能除染・放射能濃度測定技術が必要

放射線遮へいの実現後、県内の実情に最適化した放射線測定方法や、環境除染や自動販売機など動産物の除染対応が必要に。

2015年 レーザー（光応用）の技術習得と装置開発に着手

2016年 郡山校正センター設立

2017年 画像認識AIの独自開発に着手

2018年 郡山校正センターの国際認定（ISO/IEC 17025）をPJLAにて取得

### 被災地で獣害が多発

被災地に住民が戻り始めるも、避難中に野生化した家畜や、イノシシやクマなどの動物が増加。住宅や農作物被害を防ぐため、鳥獣の早期検知の仕組みが必要に。

2019年 獣害セキュリティサービス「あいわな®シリーズ」販売

2021年 本社移転 福島校正センターとして再開

2022年 会津大学齋藤研究室と共同研究開始

### 太陽光発電施設で銅線盗難が多発

仮設住宅等の跡地の有効活用として建設された太陽光発電施設で銅線盗難が頻発。被害を予防する検知システムが必要に。

2023年 レーザー除染システムの販売

2024年 無人警戒システム「VIGILA®」販売  
「VIGILA®」の活用について大手警備会社と協業開始

2026年 会津大学と特許使用許諾契約締結 エッジAI内蔵GROXA®-A発表

はじめは得体の知れない放射能をなんとかしたいと思い、測定に関する様々な取組をしてきました。時間が経ってくると高圧洗浄では取れない放射能があることを知り、レーザー光線の利用を検討しはじめました。避難地域に住民が帰還するフェーズになると、こんどはイノシシなどの獣害問題が多発しました。あたらしい危機管理のあり方を考える必要が出てきました。再生可能エネルギーの促進で建設された太陽光発電所には、銅線を盗む泥棒が来るようになりました。果物などの農産物も、盗難が相次いでおります。これらの課題についてひとつひとつ解決する手立てを考え、社会に実装してきました。

-住み続けられるふる里の実現を目指して-

- 第1章 あの日、私の人生は変わりました
- 第2章 放射線をゼロから学ぶ
- 第3章 除染現場が教えてくれたこと
- 第4章 放射線測定技術を社会へ
- 第5章 課題は変わる。しかし使命は変わらない。
- 第6章 森林再生という新たな挑戦
- 第7章 福島から、全国へ。

本日は、放射線測定や除染技術、AIや森林再生までお話ししますが、その前に、なぜ私がこの仕事をしているのか、その原点からお話しさせていただきます。宜しくお願いします。

## あの日、私の人生は変わりました

### 原点

会津若松で生まれ、東京で金融・経営の仕事に就いていました。2011年3月11日、郡山市で東日本大震災を経験しました。

**転機の瞬間** 3月16日、新潟県境で避難者として放射線測定を受けました。

自分が測定されるとは思っていませんでした。

その時、故郷の現実を初めて実感しました。

私は福島県会津若松市で生まれ育ちました。高校卒業後、大学進学を機に東京へ出ました。その後、金融業界へ入り、証券会社、住宅メーカー、ゼネコン、資産運用会社などで、経営や財務に携わる仕事をしていました。当時の私は、まさか自分が放射線を学び、福島で会社を経営することになるとは、夢にも思っていませんでした。

そして、2011年3月11日。私は仕事で福島県郡山市を訪れていました。突然、大地が激しく揺れました。それが、東日本大震災でした。その後、福島第一原子力発電所事故が発生します。情報は錯綜し、不安だけが広がっていききました。道路は寸断され、人々は避難を始めました。数日後、私は実家の片付けをするため会津若松にとまり、翌日、東京へ戻るため、上越新幹線に乗ろうと、新潟県を目指しました。県境には長い車両の列ができていました。私の乗ったタクシーもその列に並びました。

何の列だったか。避難する人たちの放射線測定です。白いタイベックに身を包んだ人が大勢いて、一人ひとりに測定器を向け、汚染の有無を確認していました。私も測定を受けました。その瞬間の光景は、15年経った今でも忘れることができません。故郷・福島の人たちが、放射線を測られながら避難しているという現実には胸が締め付けられました。私は、「とんでもないことになってしまった。」と思いました。そして、もう一つの思いが生まれました。

# 福島のために 人生を使おう

東京で行っていた事業をすべて整理し、福島へ戻りました。  
故郷を守るという一つの決意が、すべての始まりでした。



「福島のために、自分の人生を使おう。」その決意が、私の人生を大きく変えました。

東京で行っていた事業をすべて整理し、福島へ戻ることを決めました。もちろん、不安はありました。放射線の専門家ではありません。除染も知りません。測定器も扱えません。

しかし、それでも思ったのです。

「知らないなら、一から学ばばいい。」

そうして私は、昼は現場へ、夜は勉強を深める生活を始めました。毎日、測定器を持って現場へ行き、除染作業に立ち会い、多くの技術者や研究者、住民の皆様からいろいろ教えていただきました。テレビ番組でみた当時首都大学東京の先生だった大谷浩樹先生に連絡を取り、研究生として学ばせていただきました。その後大学院に入学し、大学のラボと現場で、試作したコリメータの有効性を試しました。また理解に必要な様々な事柄を、大学の図書室で読み学びました。なにを学ばばいいか、その道しるべとなっていた大谷先生のおかげで、短期間で必要なところを必要なだけ学ぶことができました。

## 日本遮蔽技研の創業

### 創業の決意

地域課題解決を目指し日本遮蔽技研を創業しました。

### 科学的アプローチ

大学院での学びを基盤に、放射線を正確に理解・伝達する技術を磨きました。

### 現場主義

毎日の現場経験を積み重ね、実用的知識を習得し現場に還元しました。



7

そして、現場は私に多くのことを教えてくれました。その中で私が学んだ最も大切なことがあります。放射線は、必要以上に恐れるものでも、軽く考えるものでもありません。

「正しく測り、正しく理解し、正しく伝える。」  
それが何よりも重要だということです。そして、その思いを形にするため、2010年に、西新宿でつくった会社を業態変更して、日本遮蔽技研を創業しました。まったく未経験の事で創業するのはさすがに初めてでしたが、故郷で暮らす人々が、安心して生活できる環境を取り戻すこと。そのために必要だった仕事が、放射線測定であり、遮へいであり、除染だったのです。この講演では、その15年間で現場が私たちに教えてくれたことを、一つひとつお話ししたいと思います。



第2章

## 放射線をゼロから学ぶ

放射線の専門家ではありませんでした。だからこそ首都大学東京(現・都立大)大学院に入学し放射線計測学を学びながら、現場で測定をしました。

- 放射線は怖がるものではなく、正しく測り、正しく理解し、正しく伝えることが大切であると、現場から学びました。

私は福島へ戻ることを決意しましたが、一つ大きな問題がありました。それは、放射線について何も知らなかったことです。金融や不動産の世界で仕事をしてきた私にとって、放射線は未知の分野でした。だから私は、放射線を感覚ではなく、科学として学ぶことを決めました。大学院で放射線計測学を学びながら、昼は現場へ行き、夜は勉強を続ける毎日でした。

## 異なる分野 知識の壁

ROI

勉強は容易ではありませんでした。後悔をしたこともありました。それまで当たり前に使っていた金融用語も、物理ではまったく別の意味だったりします。

投資収益率

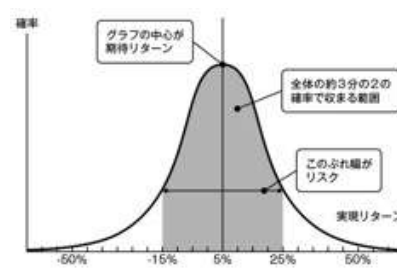
# Return Of Investment

ROI

対象領域

# Region Of Interest

期待リターンの正規分布



出典：松井証券WEBサイト

例えば、こんな風に・・・大混乱でした。でも、そんなときに何処かで昔みたグラフを思い出しました。その中で、私には一つ、とても面白い発見がありました。

## とある気づき

あしたどれだけ儲かるか  $\equiv$  放射線をどれだけ測れるか



利益 = 投資額  $\times$  期待収益  $\times$  リスク  $\equiv$  検出線量 = 放射能  $\times$  検出確率  $\times$  統計ゆらぎ

金融と放射線は、一見まったく違う世界に見えて、本質はとてもよく似ていたのです。金融の世界では、「明日どれだけ利益が出るか」を予測します。しかし、それは誰にも分かりません。だから期待収益やリスク、確率という考え方を使いながら、未来を評価します。

一方、放射線も同じでした。

放射線は目に見えません。しかも、一つひとつの放射線が検出器に入るかどうかは確率で決まります。つまり、測定値には必ず統計的な揺らぎがあります。「利益」も「放射線」も、どちらも不確実な現象を、確率と統計で評価している。この共通点に気付いたとき、私はとても驚きました。だから私は、放射線を特別に怖いものとしてではなく、「正しいデータをどう読み解くか」という視点で学ぶことができました。そして現場へ出ると、さらに大切なことを教えられました。住民の皆さんが知りたいのは、難しい放射線物理学ではありません。「この家は安全なのか。」「この車は安心して使えるのか。」「この農産物は食べられるのか。」その答えでした。

## 正しい測定にはなにが必要？

- 手頃な価格で
- 誰でも正確に
- 現場で使える

つまり、求められていたのは、現地に住む人の不安を現場で解消する測定だったのです。そこで私たちは、放射線測定器に求められる条件を、あらためて整理しました。

一つ目は、手頃な価格であること。どれほど高性能でも、高価で普及しなければ社会の役には立ちません。

二つ目は、誰でも正確に測定できること。測定する人が変わるたびに結果が変わるようでは、安心は生まれません。

そして三つ目は、現場で使えること。室内だけで性能を発揮する装置ではなく、雨の日も、寒い日も、泥だらけの現場でも確実に動くこと。それが本当に必要な技術だと考えました。私はこの頃から、「現場が本当に困っていることを解決する技術」をつくろうと決めました。

この考え方は、15年経った今も変わっていません。

放射線測定器も、AIも、森林再生も、すべて同じです。技術そのものが目的ではありません。地域の課題を解決すること。それが、私たちの技術開発の出発点なのです。

## 除染現場が教えてくれたこと

### 床下除染

- 3月福島県内は住宅着工時期
- ベタ基礎に降った雨
- 新築の屋内が屋外よりも高線量
- 正確な除染効果を求めるために専用コリメータ開発
- デコンジェルによる無水除染を実現



今日は、当時の福島県で三つの出来事をご紹介します。

一つ目は、床下除染です。震災が起きたのは3月でした。ちょうど福島県では住宅着工が多い時期です。ある日、ハウスメーカーからこんな連絡が来ました。新築した住宅の線量が高くて引渡ができない。なんとかしたい。まったく理解出来ませんでした。建て主もメーカーの担当者も不安な顔で見守る中を測定すると、本当に不思議なことが起きていました。屋外よりも、屋内の線量が高いのです。2階よりも、1階が高かったのです。それまでの経験で、雨樋に放射性物質がたまるので、1階より2階の放射線量が高いケースがあることは知っていました。「なぜだろう。」その疑問から、私は床下収納の蓋を開け、床下を回りました。そこには、誰も気付いていなかった現実がありました。新築工事の際ベタ基礎に降り注いだ雪や雨で蓄積した放射性物質が、建物内部へ影響していたのです。私たちは、床下専用の施工方法を考えました。除染効果を正確に評価するため、専用コリメータを開発し、水を使わない「デコンジェル」による無水除染に取り組みました。

## 安心は、数字から生まれる

「安全です」という言葉ではありませんでした  
「自分の家はどうか」「この中古車は大丈夫なのか」  
人々が求めていたのは数字でした

### 仮設測定ブース

だから私たちは、誰でも測定できる環境づくりを始めました。安心は、数字から生まれる。私はそう考えています。

専用コリメータとTCS172を使って放射線が来る方向と強さを測定により求め、鉛板シートを活用し県外の廃棄物処理場と、同等のバックグラウンドにした測定ブースを設置。測定対象物を福島県内で測っても、県外で測っても同じ測定結果が得られます。



EARTHSHIELD® Model-KS



二つ目は、仮設測定ブースです。バックグラウンドそのものを調整して測定することです。当時、住民の皆様から毎日のように相談を受けました。「この家は大丈夫でしょうか。」「この車は使っても大丈夫でしょうか。」「子どもが触っても大丈夫でしょうか。」

皆さんが求めていたものは、「安全です。」という言葉ではありませんでした。「自分の目で確認できる数字」でした。安心とは、説明ではなく、納得から生まれるものです。そこで私たちは、誰でも測定できる仮設測定ブースを整備しました。放射線が来る方向を特定するための専用コリメータを使って放射線の方向を解析し、鉛シートで周囲からの影響を抑え、福島県内でも都内や仙台など、県外と同じ条件で測定できる環境を整えました。

これで、特別なことをしなくでも誰でも安心して測定できる環境ができました。

## そしてはじまった**動産除染** — 生活を取り戻す

### 自動車

日常の移動手段である自動車の測定  
を行い中古で流通する自動車の安  
全・安心確保

### 自動販売機

通常のリサイクルができるよう廃棄  
物処理場に運搬される前に除染

住宅だけ除染しても、生活は戻りません。

### 動産除染は

人々の暮らしそのものを取り戻す技術でした。



ケミカルデコン：溶解除染



クロスフローシュレッダ：摩擦除染

写真提供：鹿島環境エンジニアリング株式会社



15

3つめは環境が整った後にはじまった、動産除染です。  
除染というと、多くの方は住宅や道路を思い浮かべます。しかし、生活は建物だけでは成り立ちません。自動車があります。農機具があります。エアコンの室外機があります。自動販売機もあります。これらはすべて、人々の暮らしを支える大切な財産です。住宅だけ除染しても、生活は戻りません。だから私たちは、自動車を測定し、安全を確認し、中古車として安心して流通できる仕組みづくりに取り組みました。ある大手の自動車販売会社の方から、県外に販売されていく自動車の測定を依頼されたのがきっかけでした。  
また、鹿島環境エンジニアリングの方と徹底的に議論と実証を重ね、自動販売機なども除染し、通常のリサイクルへ戻せるようにしました。動産除染とは、単なる除染技術ではありません。暮らしを取り戻す技術だったのです。

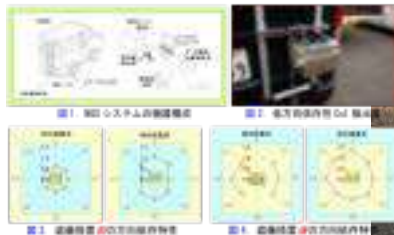
日本遮蔽技研の技術は、すべて現場から教わったものです。

第4章

## 放射線測定技術を社会へ

開発製品・システム

GPS連動走行測定器  
NSG-System



汎用コリメータ  
EARTHSHIELD®



オンサイト濃度測定器  
Monster



GPS連動水中線量測定器  
Poseidon



GPS連動歩行測定器  
ホットスポットファインダー



株式会社 日本遮蔽技研

16

現場で学んだことを、その場限りの経験で終わらせたくありませんでした。一人の技術者だけが出来る仕事ではなく、誰が測っても、どこで測っても、同じ結果が得られる。そんな仕組みをつくることが必要でした。そこで私たちは、測定技術の開発に取り組みました。まず開発したのが、コリメータです。除染効果を正確に測定することができました。後にこの特許は、福島県発明協会会長賞をいただきました。さらに、現場で放射能濃度を測定できるオンサイト測定システムを開発しました。除染で使用した水の安全性を現場で確かめるためです。ハイエースに遮へい体と検出器を搭載し、凝集沈降をかけ汚染物を沈殿させたあと、放流する前の水を採取しては、現場ではかりました。短時間で測定が完了する様、800Kgを有する高性能の遮へい体と遮へい体に穴を空ける必要がない検出器、それも、とてつもない感度の検出器を使いました。これまで検査機関へ送っていた試料を、その場で評価できる。現場の時間を大きく短縮することができました。自動車での走行測定、水中での線量率測定システムなど、現場が必要としていた測定技術を、一つひとつ形にしていきました。歩行測定器、ホットスポットファインダーは、現在でも広く県内外でご利用いただいております。

## 福島校正センター



ISO/IEC 17025:2017 認定98357  
米国PJLAにて認定を受けております

### 悲願だった校正センター

一日でも早く、福島県を安心して暮らせる場所に戻したい・・・

放射線遮へいができてこそ、放射線の利用ができます。

放射線を利用する校正機関を福島県内で立ち上げ稼働させることが悲願でした。

郡山市で立ち上げました。

コロナ禍の真っ最中、郡山市で入居していた建物の解体が知らぬ間に決まり、ある日突然、裁判所から立退きを求める訴状が届きました。

必死の銀行交渉、物件を探しプランニングをし続け、現在の本社を購入・改装・移転。

2021年11月に校正センターを再開しました。



私にはもう一つ、どうしても実現したい夢がありました。それが、福島県内に校正センターをつくることでした。放射線測定器は、校正されて初めて、現場で使用できます。つまり、測定器そのものの信頼性を支える仕事です。放射線測定器の利用が進む福島において、校正機関は欠かすことのできないインフラです。

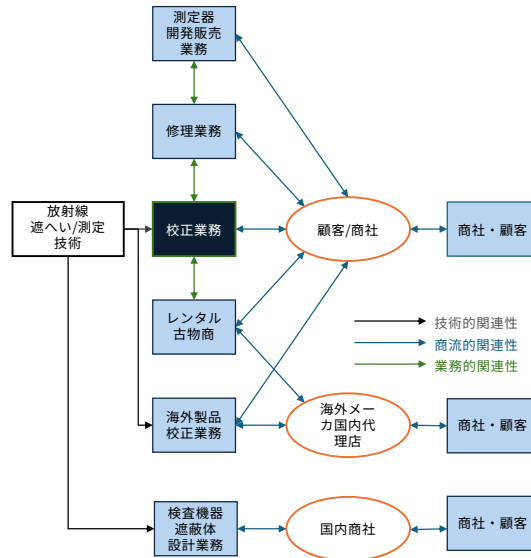
フクシマの名は世界に知られました。私は、「放射線測定器を利用するならば、福島県にも世界に通用する校正センターが必要だ。」そう考えました。そして2016年、郡山市に校正センターを設立しました。さらにISO/IEC17025の国際認定を取得し、世界的にも通用する品質管理体制を整えました。しかし、その道は決して順調ではありませんでした。コロナ禍の最中、突然、校正センターが入居していた建物の退去を求められました。裁判所から訴状が届いた時は、正直、目の前が真っ暗になりました。それでも、

「ここで終わるわけにはいかない。」

そう思い、銀行へ何度も足を運び資金繰りをし、新しい建物を探し、現在の本社を購入し、改修し、校正センターを再建しました。私はあの時、福島の放射線インフラを守ろうとしていました。だから、絶対に諦めることはできませんでした。

# 放射線関連分野の ビジネスモデル

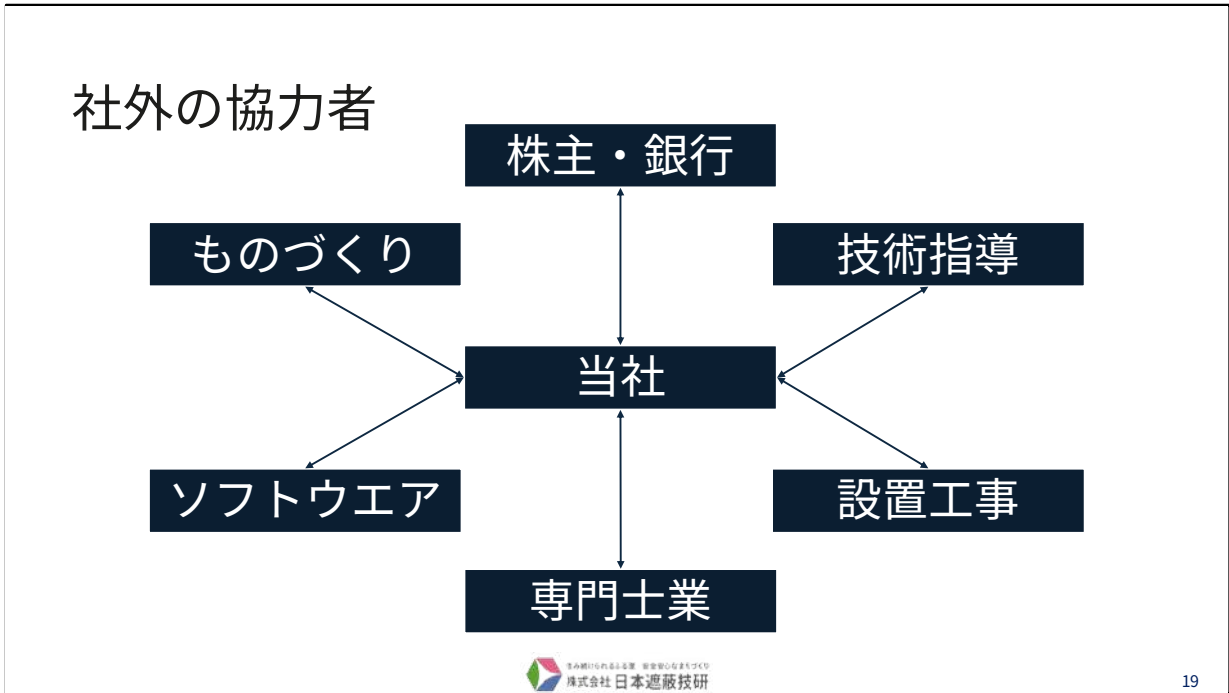
原発事故後の県内で  
放射線測定に関する  
技術サービスを実装



現在、日本遮蔽技研では、放射線測定器の販売、レンタル、校正、修理、開発、遮へい設計まで、一貫して対応しています。これは現場で困っている方が、どこへ相談すればいいかわからない。そんな状況をなくしたかったのです。測定器は、数字を表示する機械ではありません。人の安心を支える道具だと私は思います。

そして校正とは、その安心を守る最後の砦なのです。だから私たちは、これからも数字に責任を持ち続けます。それが、福島で学んだ私たちの使命だからです。

「測定器が測っているのは放射線ではありません。人々の安心を測っているのです。」



そして弊社には、ご覧のようにたくさんの協力者ができました。いまのこの会社があるのは本当に仲間のおかげです。



## レーザー除染への挑戦

除染技術はさらに進化しています。レーザー除染に挑戦し、二次廃棄物を極力発生させない除染技術の研究を続けています。

福島に必要な技術が、次世代のインフラ長寿命化技術として標準になることを目指しています。

2014年ごろから、既存の高圧洗浄などでは除染できないものが出てきました。錆に取り込まれてしまったセシウム、コンクリートにしみこんでしまったセシウムです。その解決のために、LDDの峰原先生に技術指導をいただいております。おかげで、産業廃棄物処理施設で自動車や農機具などの除染施工に、レーザー除染を導入していただくことができました。

## 課題は変わる。しかし使命は変わらない。



### 獣害

旧避難区域での野生動物による農業・生活被害への対応が急務となりました。



### 太陽光発電施設の盗難

仮置場がメガソーラーに。ケーブルを狙った盗難が地域の新たな課題となりました。



### 人手不足・地域の危機管理

震災後の人口減少により、地域の安全を守る人材が不足しています。

震災から年月が経ちました。福島は少しずつ復旧していきました。しかし、その一方で、新しい課題が生まれてきました。避難区域では野生動物が増えました。いまではクマの話題を聞かない日はありませんが、当時、苦労して農業を再開した人達を困らせていたのが、イノシシやサルでした。そして、仮置場や仮設住宅の跡地には太陽光発電施設が建設されました。今度は銅線盗難という新しい犯罪が増えてきました。

16万人が避難しました。自然豊かで美しかった町は、人口減少どころか、人口消滅しました。帰還が進む現在もその影響は続き獣害・盗難は社会課題です。地域を見守る人そのものが、あまりにも少ないということです。課題は変わりました。しかし、私たちの使命は何も変わりません。私は、この時改めて考えました。私たちが本当に取り組んできた技術とは何だったのか。放射線でしょうか。AIでしょうか。レーザーでしょうか。違いました。私たちが取り組んできたのは、「見えない危険を見えるようにする技術」でした。

## 「リモートセンシング技術」 目視を画像認識AIへ

放射線技術で培った

「見えない危険を見える化技術」は

地域を見守る画像認識AIへ進化

東日本大震災を教訓に

停電してもとまらない見守り

コンセントがないところでも使える

目視監視ツールを実現



### AIプロダクト群

- あいわな®クラウド — 獣害対策AIシステム
- VIGILA® — 監視・セキュリティAI
- GROXA® — エッジAI(会津大学共同研究)

金融では、未来のリスクを数字で見えるようにします。放射線では、目に見えない放射線を数字で見えるようにしました。2017年から画像認識AIの開発に取り組みました。そして現在は、画像認識AIによって、人の目では見続けることができない危険を、24時間見守ることができるようになりました。

これらは全く別々の技術ではありません。私は、リモートセンシングという一つの技術思想でつながっていると考えています。人がその場へ行かなくても、遠くから状態を把握する。人が気付けない変化を検知する。危険が起きる前に知らせる。これこそが、私たちが追いつけてきたテーマでした。





## 森林再生が拓く未来

### 放置山林の活用

管理されていない山林を再生し、地域資源として活かします。

### カーボンクレジット

森林再生をカーボンクレジットとして価値化、持続可能な収益モデルを構築します。

### 木材利用

福島産木材の利活用を推進し、地域経済の再生に貢献します。



福島の森林は、純国産エネルギーの源になります。木材資源になります。水を育てます。食料生産を支える環境を守ります。そして、カーボンクレジットという新しい価値も生み出します。森林を守ることは、環境を守ることだけではありません。地域経済を守ることでもあります。次の世代へ、日本の資源を残すことでもあります。

私は今、森林再生という課題と向き合っています。一見すると放射線やAIとは全く違うように見えます。

しかし私の中では、何も変わっていません。福島復興の役に立ちたい。困っている人の役に立ちたい。その思いが、放射線測定にも、AIにも、そして森林再生にもつながっています。



## AFFA 一般社団法人農林水産振興機構の提案

### 農林水産で切り拓く：福島・地方創生の4つのプラン

福島の豊かな自然資源（農林水産）を活用し、経済とコミュニティを再興する包括的な戦略を理解する。  
農林水産振興機構（AFFA）が提案する、地域の資源を「守り、活かし、稼ぐ」ための4つの具体的アクション。  
地元の「農・林・水」を核とした、持続可能な自立型経済モデルの構築。



#### 01 山林を「負債」から「資産」へ変える

相続支援とカーボンクレジット化により、放置された山林を新たな収益源へと転換します。



#### 02 エネルギーと技術で産業を近代化

未利用木材のバイオマス発電とIoT導入により、効率的で地産地消の循環経済を目指します。



#### 03 地元ブランドの再定義と高付加価値化

アロマ栽培や特産品開発、ふるさと納税の活用で、域外からの資金流入を最大化します。



#### 04 「人」が主役の持続可能なコミュニティ

地元企業を強化し、教育と移住促進を通じて、地域に愛着を持つ関係人口を拡大します。

**-福島創生-**

そして農林業で地方創生を実現したいと考えております。森林を守ることは、木を守ることではありません。人の暮らしを守ることです。そして、人の暮らしを守ることは、福島の未来を守ることだと信じています。ゆくゆくは、水産業にも何らかの形でお役に立ちたいと思っています。これからの15年は、福島創生と向き合っていきます。未来の子どもたちが、『福島に生まれてよかった』と思えるふる里を残すために、いまを生きる大人として、頑張りたいと思います。

# 福島から、全国へ。

食の安全を守る

重金属の高感度分析が可能な

蛍光エックス線分析装置



写真提供：日衛工業株式会社



あの日を超えて、  
FUKUSHIMA

住み続けられるふる里  
安全安心なまちづくり

“変わりゆく群島”への対応＝当社のサービス開発の歴史

<p><b>放射線測定・放射線測定装置</b></p> <p>放射線測定器、放射線測定装置の開発・製造・販売、放射線測定器の保守・修理、放射線測定器のレンタル。</p>	<p>2011年 株式会社日本測研設立</p> <p>2012年 株式会社日本測研福島支店開設</p> <p>2013年 株式会社日本測研仙台支店開設</p> <p>2014年 株式会社日本測研札幌支店開設</p> <p>2015年 株式会社日本測研東京支店開設</p> <p>2016年 株式会社日本測研大阪支店開設</p> <p>2017年 株式会社日本測研名古屋支店開設</p> <p>2018年 株式会社日本測研福岡支店開設</p> <p>2019年 株式会社日本測研広島支店開設</p> <p>2020年 株式会社日本測研金沢支店開設</p> <p>2021年 株式会社日本測研北九州支店開設</p> <p>2022年 株式会社日本測研新潟支店開設</p> <p>2023年 株式会社日本測研長野支店開設</p> <p>2024年 株式会社日本測研山梨支店開設</p> <p>2025年 株式会社日本測研甲信越支店開設</p>
<p><b>放射線測定・放射線測定装置</b></p> <p>放射線測定器、放射線測定装置の開発・製造・販売、放射線測定器の保守・修理、放射線測定器のレンタル。</p>	<p>2011年 株式会社日本測研設立</p> <p>2012年 株式会社日本測研福島支店開設</p> <p>2013年 株式会社日本測研仙台支店開設</p> <p>2014年 株式会社日本測研札幌支店開設</p> <p>2015年 株式会社日本測研東京支店開設</p> <p>2016年 株式会社日本測研大阪支店開設</p> <p>2017年 株式会社日本測研名古屋支店開設</p> <p>2018年 株式会社日本測研福岡支店開設</p> <p>2019年 株式会社日本測研広島支店開設</p> <p>2020年 株式会社日本測研金沢支店開設</p> <p>2021年 株式会社日本測研北九州支店開設</p> <p>2022年 株式会社日本測研新潟支店開設</p> <p>2023年 株式会社日本測研長野支店開設</p> <p>2024年 株式会社日本測研山梨支店開設</p> <p>2025年 株式会社日本測研甲信越支店開設</p>
<p><b>放射線測定・放射線測定装置</b></p> <p>放射線測定器、放射線測定装置の開発・製造・販売、放射線測定器の保守・修理、放射線測定器のレンタル。</p>	<p>2011年 株式会社日本測研設立</p> <p>2012年 株式会社日本測研福島支店開設</p> <p>2013年 株式会社日本測研仙台支店開設</p> <p>2014年 株式会社日本測研札幌支店開設</p> <p>2015年 株式会社日本測研東京支店開設</p> <p>2016年 株式会社日本測研大阪支店開設</p> <p>2017年 株式会社日本測研名古屋支店開設</p> <p>2018年 株式会社日本測研福岡支店開設</p> <p>2019年 株式会社日本測研広島支店開設</p> <p>2020年 株式会社日本測研金沢支店開設</p> <p>2021年 株式会社日本測研北九州支店開設</p> <p>2022年 株式会社日本測研新潟支店開設</p> <p>2023年 株式会社日本測研長野支店開設</p> <p>2024年 株式会社日本測研山梨支店開設</p> <p>2025年 株式会社日本測研甲信越支店開設</p>
<p><b>放射線測定・放射線測定装置</b></p> <p>放射線測定器、放射線測定装置の開発・製造・販売、放射線測定器の保守・修理、放射線測定器のレンタル。</p>	<p>2011年 株式会社日本測研設立</p> <p>2012年 株式会社日本測研福島支店開設</p> <p>2013年 株式会社日本測研仙台支店開設</p> <p>2014年 株式会社日本測研札幌支店開設</p> <p>2015年 株式会社日本測研東京支店開設</p> <p>2016年 株式会社日本測研大阪支店開設</p> <p>2017年 株式会社日本測研名古屋支店開設</p> <p>2018年 株式会社日本測研福岡支店開設</p> <p>2019年 株式会社日本測研広島支店開設</p> <p>2020年 株式会社日本測研金沢支店開設</p> <p>2021年 株式会社日本測研北九州支店開設</p> <p>2022年 株式会社日本測研新潟支店開設</p> <p>2023年 株式会社日本測研長野支店開設</p> <p>2024年 株式会社日本測研山梨支店開設</p> <p>2025年 株式会社日本測研甲信越支店開設</p>

課題解決型企業として  
“メイドイン福島”から全国へ

27

ここまで、私たちの15年間の歩みをお話ししてきました。  
振り返ってみると、放射線測定も、除染も、遮へいも、AIも、森林再生も、一つひとつ全く違う仕事のように見えます。しかし、私の中では、すべて一本の線につながっています。その線とは、「困っている人の役に立ちたい。」という思いです。

## 福島が世界に残したものの

### 原発事故が奪ったもの

原発事故は福島から多くのものを奪いました。

### 福島に残ったもの

しかし、福島には世界でも類を見ない知識と経験、そして現場技術が生まれ続けています。

### 私たちの決意

その技術を、復興だけで終わらせたくありません。日本全国へ届けます。

震災直後、私たちは放射線という課題に向き合いました。その経験の中で、正しく測ること。数字で伝えること。科学に基づいて判断すること。その大切さを学びました。やがて地域の課題は変わりました。

獣害。

盗難。

人口減少。

森林管理。

しかし、私たちが目指すことは何一つ変わっていません。地域を守ること。そのために、技術を育て続けています。私は思います。福島は、世界でも例のない経験をしました。本来であれば、経験しなくてもよかった経験です。

だからこそ、この経験を、福島だけのものにしてはいけない。

福島で培った知識。

福島で培った技術。

福島で培った現場力。

これらは、日本全国の地域が抱える課題にも、必ず役立つと信じています。

## 技術の歩み — 放射線からAI・森林再生へ



震災を契機に始まった放射線技術への挑戦は、AI・環境分野へと広がり、地域を守る総合的な技術基盤へと進化しました。

雪国には雪国の課題があります。離島には離島の課題があります。都市には都市の課題があります。地域ごとに課題は違います。

しかし、その課題を、正しく知り、正しく測り、正しく判断し、解決していく。その考え方は共通しています。

私は、そのお手伝いを、これから全国で続けていきたいと思っています。そして、いつの日か、福島で育った技術が、日本全国で役立ち、さらに世界でも役立つ日が来ることを願っています。

それが15年前、避難者として放射線測定を受けた一人の福島県民として、私が果たしたい夢です。

## 震災前よりも、強く。

震災前に戻ることが復興ではありません。  
震災前よりも、安全で、強く、持続可能な地域をつくること。  
それが私たちの目指す復興です。

積み重ねられる小さな夢 安全安心なまちづくり  
株式会社 日本遮蔽技術



30

最後に、一つだけお伝えしたいことがあります。どんな困難も、人は知恵に変えることができると信じています。そして、その知恵は、必ず誰かの未来を守る力になります。福島は、震災を経験した地域です。しかし私は、震災を乗り越え、未来を創り続ける地域として、これからも福島を語り続けたいと思います。そして、福島で育った技術が、日本全国の地域を支え、人々の安心につながることを願い、これからも歩み続けます。

# 一灯照隅

ご清聴ありがとうございました

**Shielding Lives for Tomorrow.**



31

『一灯照隅』という言葉があります。  
大きなことを一度に成し遂げることはできなくても、まずは自分のいる場所を、身近な人の不安を、一つひとつ、明るくあたたかくしていく。

福島で培った技術と経験が、福島県はもとより、日本全国で同じような課題に向き合う方々の助けになること。それが、私個人としても日本遮蔽技研としても、これから果たしていきたい使命です。

私たちは、放射線を学んだ会社ではありません。福島県で、人を守るとは何かを学んだ会社です。

これからも、身近な一隅を照らしながら、人を守り、地域を守り、未来へつなげる仕事を続けてまいります。本日は、長時間にわたりご清聴いただき、誠にありがとうございました。